

水稻新品種「えみのあき」の主要特性

津田直人・太田久稔・山口誠之¹⁾・福嶋 陽・梶 亮太²⁾・中込弘二³⁾・片岡知守⁴⁾・遠藤貴司⁵⁾・横上晴郁
(農研機構東北農業研究センター・¹⁾ 農研機構作物研究所・²⁾ 農研機構北海道農業研究センター・³⁾ 農研機構近畿中国四国農業研究
センター・⁴⁾ 農研機構九州沖縄農業研究センター・⁵⁾ 宮城県古川農業試験場)

Characteristics of a new rice cultivar “Eminoaki”

Naoto TSUDA, Hisatoshi OHTA, Masayuki YAMAGUCHI¹⁾, Akira FUKUSHIMA, Ryota KAJI²⁾, Kouji NAKAGOMI³⁾, Tomomori KATAOKA⁴⁾,
Takashi ENDO⁵⁾ and Narifumi YOKOGAMI

(NARO Tohoku Agricultural Research Center・¹⁾ NARO Institute of Crop Science・²⁾ NARO Hokkaido Agricultural Research
Center・³⁾ NARO Western Region Agricultural Research Center・⁴⁾ NARO Kyushu Okinawa Agricultural Research Center・

⁵⁾ Miyagi Prefectural Furukawa Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

国内における米の消費が減少する状況下においても中食・
外食産業向けの業務用米の需要は安定しており、実需者・生
産者からは低コスト栽培が可能な良食味水稻品種が求められ
ている。このような背景の中で、東北農業研究センターでは
2006年に短稈で耐倒伏性が強い多収・良食味品種として「萌
えみのり」を育成した。「萌えみのり」は業務用米を中心に普
及が進んでおり、直播栽培による低コスト化への取り組み事
例も増えてきている。しかし、「萌えみのり」はいもち病抵抗
性が十分ではなく、いもち病の常発地帯では作付けが難しい。
そこで、さらなる栽培適地の拡大と低コストで安定的な栽培
を行うため、「萌えみのり」と同様の特性をもちながらも優れ
たいもち病抵抗性を付与した水稻新品種「えみのあき」を育
成した。

2 育成経過

「えみのあき」は愛知県育成の良質・良食味でいもち病抵
抗性が極強である「中部 111 号 (後の「みねはるか」)」を母
とし、「奥羽 382 号 (後の「萌えみのり」)」を父とする交雑後
代から育成された (表 1)。2003 年に東北農業研究センターに
おいて F₁ 種子を得た後、2004 年に沖縄県農業試験場八重山支
場 (現 沖縄県農業研究センター石垣支所) において F₂、F₃ 世
代を世代促進栽培で養成した。2005 年に F₄ 世代で個体選抜、
2006 年 (F₅ 世代) に単独系統選抜を行い、以後、系統として
選抜・固定をはかってきた。2007 年 (F₆ 世代) より「羽系 1047」
の系統番号で生産力検定試験、特性検定試験に供試し、その
成績に見通しを得たので、2009 年の F₈ 世代から「奥羽 407 号」
の地方系統名を付し、関係各県に配付して地域適応性を検討
してきた。「えみのあき」は「ひとめぼれ」並の食味をもちな
がら、いもち病圃場抵抗性が強く、直播適性の高い系統であ
ったため、2013 年に「えみのあき」と命名し、種苗法に基づ
く品種登録出願を行い、2015 年に登録された (登録番号

24271)。

3 特性概要

① 形態的特性

成熟期の稈長は“短”で「ひとめぼれ」よりもかなり短く、
穂長は“中”で「ひとめぼれ」と同程度であり、穂数は“やや
多”で「ひとめぼれ」並かやや多い (表 1、図 1)。草型は“偏
穂数型”に属する。稈の太さは“中”で、稈の柔剛は“やや
剛”である。耐倒伏性は“強”であり、「ひとめぼれ」よりも
明らかに優れる。芒は“やや少”で、“短”である。ふ先色は
“白”、穎色は“黄白”である (図 1、図 2)。

② 生態的特性

出穂期および成熟期は「ひとめぼれ」並で、育成地では“中
生”に属する。いもち病真性抵抗性遺伝子型は“*Pia*、*Pi1*”
と推定される (表 1)。いもち病圃場抵抗性遺伝子 *Pi39* をも
つと推定され、葉いもち圃場抵抗性、穂いもち圃場抵抗性と
もに“極強 (旧基準)”である (表 1、図 3)。白葉枯病圃場抵
抗性は“やや強”であり、縞葉枯病に対しては“罹病性”であ
る。障害型耐冷性は“強 (旧基準)”であり、穂発芽性は“難”
である。収量は移植栽培において「ひとめぼれ」並で、湛水直
播栽培では「ひとめぼれ」よりも多収である。玄米千粒重は
「ひとめぼれ」と同程度であり、玄米品質は「ひとめぼれ」並
の“上中”である (表 1、図 2)。

③ 食味関連特性及び食味官能試験

移植栽培における「えみのあき」の玄米のタンパク質含有
率は 5.7% で「ひとめぼれ」並であり、白米のアミロース含有
率は 17.1% で「ひとめぼれ」よりやや低い。食味は味官能試験
の結果、“上中”で「ひとめぼれ」並である (表 1)。

4 栽培適地及び栽培上の留意点

栽培適地は東北中部以南である。縞葉枯病には罹病性であ
るため、常発地帯での作付けは避ける。

表1 「えみのあき」の特性一覧表

品種名	えみのあき 組合せ:中部111号(みねはるか)/奥羽382号(萌えみのり)					
特性	長所			短所		
	1 耐倒伏性が強く、直播栽培に適す。 縹葉枯病に罹病性である。					
	2 いもち病抵抗性が極強である。					
栽培適地	東北中部以南					
調査地	東北農業研究センター(秋田県大仙市)					
栽培条件 (調査年次)	直播・表面条播区(2007～2012年)			移植・標肥区(2008～2012年)		
品種名	えみのあき	ひとめぼれ	萌えみのり	えみのあき	ひとめぼれ	萌えみのり
苗立ち率(%)	73.6	70.3	72.6	—	—	—
出穂期(月・日)	8.13	8.13	8.11	8.06	8.05	8.04
成熟期(月・日)	9.26	9.25	9.24	9.21	9.2	9.21
稈 長(cm)	69	87	70	71	88	73
穂 長(cm)	18.2	18.2	18.3	19.3	19.3	19.5
穂 数(本/㎡)	577	539	579	492	494	475
耐倒伏性	強	やや弱	強	—	—	—
倒伏程度	0.2	3.1	0.9	0	2.8	0.1
耐冷性	強	極強	強	—	—	—
いもち遺伝子型	<i>Pia, Pii</i>	<i>Pii</i>	<i>Pia, Pii</i>	—	—	—
葉いもち	極強	やや弱	やや弱	—	—	—
穂いもち	極強	中	中	—	—	—
白葉枯病	やや強	やや弱	中	—	—	—
縹葉枯病	罹病性	罹病性	罹病性	—	—	—
精玄米重(kg/a)	62.8	57.7	67.9	64.2	65.6	68.5
玄米重標準比(%)	109	100	118	98	100	104
玄米千粒重(g)	22.5	22.2	23.3	23.5	23.2	24.1
玄米品質	上中	上中	上下	上中	上中	上下
食 味	上中	上中	上中	上中	上中	上中
玄米タンパク質含有率(%)	—	—	—	5.7	5.8	5.7
白米アミロース含有率(%)	—	—	—	17.1	18.3	18.9

注)直播播種日:5月11日、移植日:5月18日。倒伏程度は0(無)~5(甚)の6段階評価。
白米アミロース含有率は、2008~2011年の平均。玄米タンパク質含有率は近赤外分光分析(FOSS社 infratec1241)、白米アミロース含有率はブラン・ルーベ社オートアナライザーⅡ型で測定。
耐冷性、いもち病抵抗性は旧基準を記載。



図1 「えみのあき」の草姿



図2 「えみのあき」の籾及び玄米写真

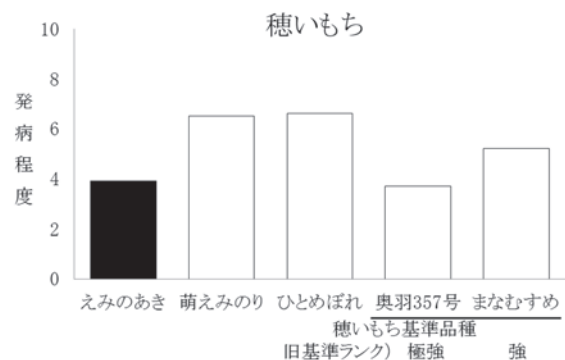
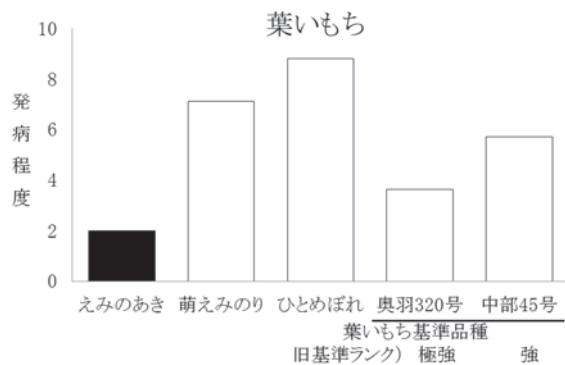


図3 「えみのあき」の葉いもち・穂いもち検定試験の発病程度

(発病程度:0(無発病)~10(全穂枯死)の達観判定)。2007~2012年の平均。ランクは旧基準。